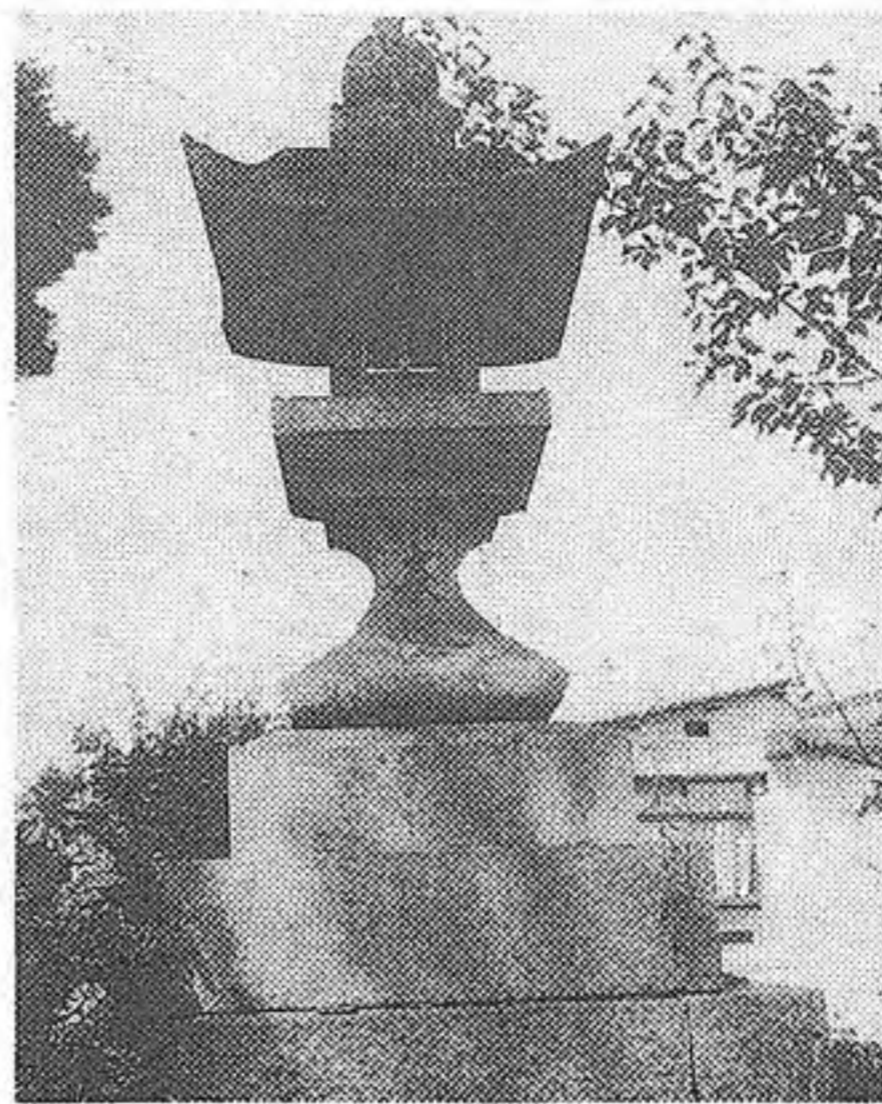


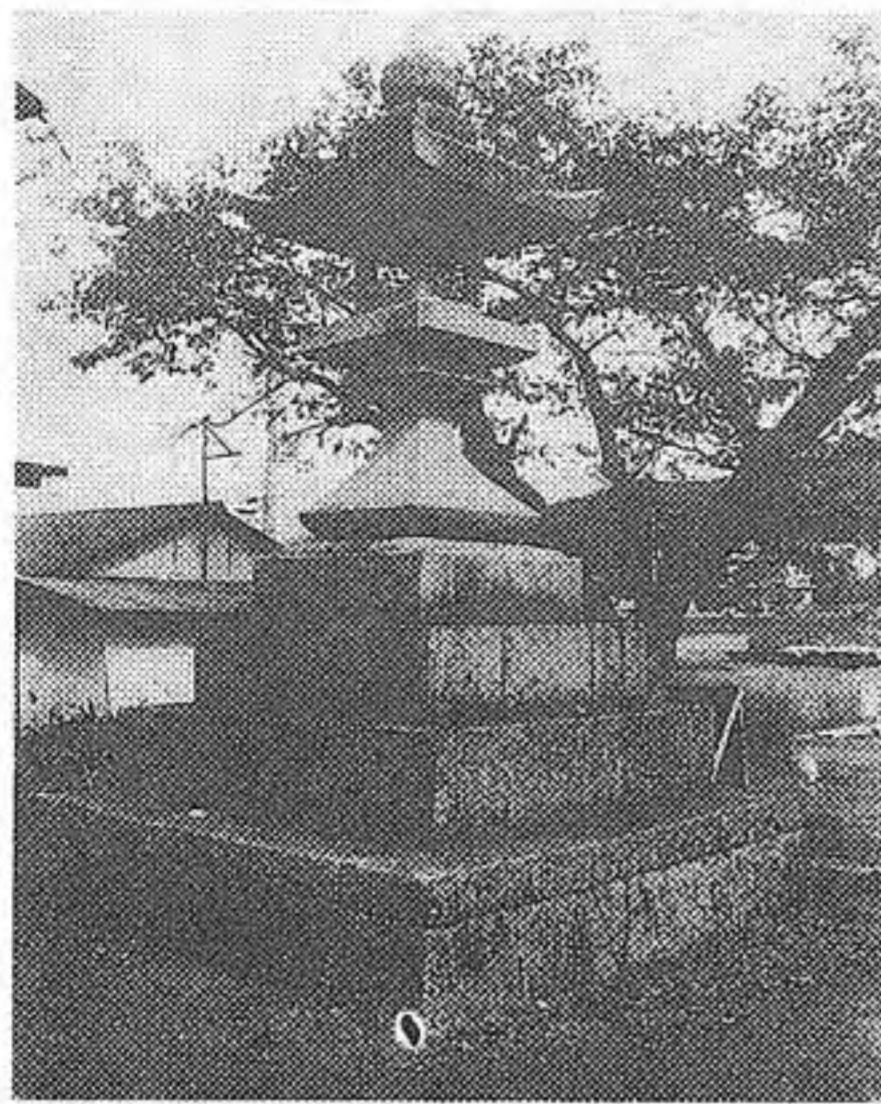
ふるさと探訪

〔2〕

宮代町の綾部八幡宮。神基だけ高さ三尺はあろうか社の北側、井倉方面から参拝すると、鳥居の右側に一



綾部八幡宮参道の右側に
一基だけ建っている石灯籠(宮代町で)



もともとは綾部八幡宮に建つ
はずだったと伝えられる大川
神社の石灯籠(舞鶴市で)

があることは不思議でも何

でもない。しかし、狛犬

(こまいぬ)にしる石灯籠

にしる、二基一对であるべ

きなのが普通。神社に向

かって右側に一基しかな

く、対になっていない灯籠

にはそれなりの理由があり

れる。

石は由良石と呼ばれる花

崗(かこう)岩。名前の通

り丹後の由良で掘り出さ

れ、地元の石工(いしく)

が造ったもので、注文は二

基一对。時代は江戸から明

治に移ったばかり。高さ三

へ約八尺、現在の舞鶴市大

川のあたりで船は荷崩れを

起こした。思わぬ事故で灯

籠が一基、深さ三〜六尺ほ

どの川底に沈んでいった。

結果、残った右側の灯籠の

みが綾部八幡宮に建立され

た。

それでは、由良川にはい

まだに左側の灯籠が沈んで

いるのかといえ、そうで

綾部八幡宮の石灯籠

「相棒」は舞鶴にいます

一基だけのなぞは126年前に

そうだ。

一基だけの灯籠のなぞは

一八六七年(慶応三年)に

までさかのぼる。その前

年、慶応二年に孝明天皇が

崩御(ほうぎよ)し、明治

天皇が即位した。灯籠の後

ろの面に慶応三年の文字が

あることから、当時の井倉

村の住民がその即位を記念

して寄進したものと考えら

げもの石灯籠を二基も輸送

するには、船に積み込み由

良川をさかのぼるのが最も

早く、楽だった。

丹後由良で二基の灯籠を

積み込んだ運搬船は、一

路、綾部は大島の船着き場

に向け港を離れた。相当、

大がかりな輸送作業だった

ことは想像に難くない。

由良を出発してから上流

はない。綾部八幡宮の氏子

の間では、沈んだ場所のす

ぐ近くにある大川神社が八

幡宮との話し合いの末に灯

籠を引き上げ、同神社の鳥

居の前に建てたと言われて

いる。

同神社には、綾部八幡宮

船で荷崩れ由良川に沈む

と全く同じ大きさの灯籠が

二基一对ある。神社に向

かって左側の灯籠には、灯

籠を造った職人であろう

「由良村・澤井某(なにが

し)」と名前が刻んであ

る。しかも、それは灯籠の

前面に刻まれている。ふつ

う前面には「奉燈」などの

文字を入れ、製作者の銘な

どは裏面に入れるはずであ

る。右側の灯籠には銘はお

ろか寄進された年月日も刻

まれていない。これも不自然だ。

綾部八幡宮の氏子た

ちの意見に従えばこの

どちらかがもともと八

幡宮に建立されるべき

ものであり、もう一方

はそれにあわせて新た

に建てたものとなる。

大川神社宮司の高田

充さんは「どちらの灯

籠も寄進帳に記録され

ていないし、そんな話

を聞いたのも初めて

だ」と驚いた様子で話

していた。